

支店長の わがまち紹介 第65回



霞ヶ浦観光帆引き船
写真提供：霞ヶ浦帆引き船・帆引き網漁法保存会

かすみがうら市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接なつながりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県かすみがうら市です。千代田支店長がかすみがうら市長坪井透氏にお話を伺いました。

かすみがうら市は「筑波経済月報」第8号(2014年3月)第8回本コーナーにて紹介させていただきました。改めまして、本市の魅力や特徴、展望についてお聞かせください。

■歴史・伝統・文化を後世に継承するまち

本市は、国内第2位の面積を誇る湖「霞ヶ浦」と同じ名を持つことが大きな特徴で、雄大な霞ヶ浦や美しい筑波山系の自然環境、豊富な農水産物、歴史文化遺産などの多様な地域資源を有するまちです。

なかでも、本市発祥の「帆引き船」は霞ヶ浦の重要な文化遺産です。明治初期に考案された帆引き網漁は、昭和中期に登場したトロール船に代わるまで、霞ヶ浦の漁業を支えてきました。

昭和46年には「観光帆引き船」としてよみがえり、現在も運航しています。霞ヶ浦の風を受け、大きな白い帆を膨らませてゆっくりと湖面を進むその姿は、霞ヶ浦を訪れる人々の目を楽しませています。

また、本市は、今年で第18回を迎えるフォトコンテストや模型作り教室など、帆引き船にまつ

わるイベントを多数開催しています。このような取り組みのほか、市民の有志による帆引き船の操船技術の継承活動などが実を結び、今年3月、「霞ヶ浦の帆引網漁の技術」が国の選択無形民俗文化財に選定されました。

これからも、帆引き船の保存継承を共に進めてきた土浦市や行方市と連携を図り、技術継承や映像記録などを通じて、伝統ある霞ヶ浦の漁業文化を後世に伝えていきたいと考えています。



帆引き船発祥の地記念碑 (写真提供：かすみがうら市)



かすみがうら市長
坪井 透氏



千代田支店長
高橋 邦芳



市長公室長
木村 義雄氏



都市産業部長
鈴木 芳明氏



観光商工課長
根本 和幸氏

■サイクリングで地域活性化

近年のサイクリングブームを背景に、県内外から多くのサイクリストが霞ヶ浦湖畔を訪れていることに着目し、自転車に関するイベントを多数開催しています。なかでも、代表的なイベントは、毎年10月に霞ヶ浦湖畔に広がる歩崎公園で開催している「かすみがうらエンデューロ」です。

このイベントは、1周が4.8kmのコースを指定時間内に何周できるかを競う5時間の自転車耐久レースです。通常、エンデューロレースは、サーキットなどのクローズドコースを使用して行われることが多いですが、本市のレースは、日本百景にも選ばれている霞ヶ浦の湖畔沿いを自転車で駆け抜けるため、爽快感が味わえます。また、チームでの参加となるため、周を重ねるごとにチームメイト同士の絆を深めることができるのも魅力的です。

当日は、グルメフェスや子どもたちも参加できる企画を同時開催しています。家族連れでも一日楽しめるイベントになっているため、毎年約1,200人もの来訪者で賑わいます。

今後も自転車による地域振興に加え、健康増進としての自転車の利用促進に取り組んでいきます。



かすみがうらエンデューロ (写真提供：かすみがうら市)

本市は、サイクリストによって確実に増加している交流人口を活かし、さらなる観光振興を図り

たいと考えています。サイクリストの種類は2つあり、一つは競技力の向上が目的の方、もう一つは本市の地域資源を体験して楽しむことが目的の家族世帯です。

前者には、エンデューロレースの開催や湖畔の霞ヶ浦自転車道の提供、後者には、官民連携により設立した「かすみがうら未来づくりカンパニー」が主催する市内の果樹園や名所などを自転車で巡る「ライドクエスト」事業を展開することで、要望に応じていきたいと考えています。

サイクリングと果物狩りをコラボさせることで、これまでの「遊ぶ・楽しむ」だけの観光ではなく、「体験と交流」の観光へと移行させ、集客力の向上につなげたいと考えています。今後、よりプロモーションに力を入れ、首都圏からのさらなる観光誘客に向けて取り組んでいきます。



かすみがうらライドクエスト (写真提供：かすみがうら市)

■新たな価値で地域産業を振興

本市の名産品といえば佃煮が有名ですが、最近では焼き芋にも注目が集まっています。市内にはさつまいもの加工企業が多く、なかでも、さつまいも専門の加工卸売会社「ポテトかいつか」は、圧倒的な人気を誇っています。

かつて焼き芋は、焼きたてで冷えた体を温めてくれる冬の食べ物でした。しかし、「紅はるか」

という新品種を使い、十分に糖化させたことで、冷えたままでも美味しく食べることができるようになりました。この冷たくても甘みの強い焼き芋は、多くの方からまるでスイーツのようだと親しまれています。焼き芋の新しい食べ方を提案できたことは革命的で、本市の6次産業化の成功事例の一つといえます。

次なる6次化のターゲットは、本市千代田地区の栗です。生栗は、青果店で安く購入できますが、食べるまでに手間がかかるため、一般家庭での消費量はあまり多くありません。しかし、栗はお菓子にすると高級品に様変わりします。現在は、出荷するだけの産地にとどまっていますが、今後は栗の加工、お菓子などの製造まで地元で行うことで、本市のブランド力の向上を目指したいと考えています。



千代田地区の栗（写真提供：かすみがうら市）

■健康に暮らせるまちづくりを目指して

本市は、市民の健康寿命を伸ばすことが重要であるとの考えから、昨年3月に「健康まちづくり宣言」を行いました。そして、今年5月には、土浦協同病院、神立病院、筑波大学と連携協定を締結し、市民の生活習慣病の予防事業を展開しています。

この事業では、市内4地区を健康づくりの「モデル地区」に定め、対象者の健康診断などのデータをもとに、生活習慣の改善を図ります。また、筑波大学運動生理学研究室の協力を得て、収集したデータを分析し、健康体操を導入するなど、運動面のサポートも行います。

行政が大学、医療機関、市民と連携した事業は、日本で初めての取り組みです。今後も市民の健康への意識を高めるため、さまざまな事業を展開し

ていきます。

平成28年、土浦市内の土浦協同病院が本市近くに移転し、利用者の利便性が向上しました。市民が行政に最も期待することは、安全で安心な暮らしです。市内の開業医の数は、決して多くはありませんが、本市近隣に土浦協同病院と神立病院の2つの総合病院があることで、医療に対する市民の不安は軽減されていると思います。

さらに、今後、石岡市と共同で、千代田庁舎先から角来地区へ向かう道路を新たに整備する予定です。これにより、市内の交通網の強化だけでなく、土浦協同病院に通ずる道路として、救急体制の充実も図ることができると考えています。

また、現在、本市は、子育てに関する情報発信と交流の場の提供に取り組んでいます。特に、妊娠期から産前産後のケア、育児など子育てに不安を抱える母子の相談窓口に、保健師や助産師などの専門相談員を「子育てコンシェルジュ」として配置し、安心な子育てのサポート支援を進めています。

近年、核家族化や近隣における人間関係の希薄化が進み、育児をしながら孤立感や不安感を抱く母親が増えています。こうしたなか、本市では、安心して子どもを産み、ゆとりを持って子育てができるようにするため、今後も「子育てコンシェルジュ」をはじめとした子育て世代に対する支援機能の充実に努めていきます。

■筑波銀行に期待すること

本市の指定金融機関として、まちづくりに関する広いアドバイスの提供のほか、地域振興支援プロジェクト「あゆみ」による支援金の提供や市のイベントに関わるボランティア活動などの支援をしていただいております、とても感謝しています。

地方創生事業を推進するにあたり、「産官学金労言」は重要であると認識しています。行政の情報収集には限度があります。筑波銀行が持つ様々な分野の情報や分析結果などのご提案、ご指導をいただきますよう、今後ともよろしくお願ひします。

取材日：平成30年10月1日